

「基本日本語」科目における3授業連系の試み —Can-do 記述に基づくタスク遂行型のシラバス・デザインとその実践—

香月 裕介

キーワード：シラバス・デザイン、授業連係、Can-do 記述、タスク遂行型

1. はじめに

神戸学院大学グローバル・コミュニケーション学部日本語コースでは、2015 年度前期に開講された3つの「基本日本語」科目（「日本語会話Ⅰ」「日本語読解Ⅰ」「日本語表現Ⅰ」）において、これら3授業を連係させる形で、Can-do 記述に基づくタスク遂行型のシラバス・デザインおよび授業実践を行った⁽¹⁾。

本稿では、「3 授業連係」と「Can-do 記述に基づくタスク遂行型」の二点を特長とした「基本日本語」におけるシラバス・デザインの過程とその実践例を記述し、効果と課題について考察する。

2. 「基本日本語」科目の概要

「基本日本語」は、日本語コース1・2年次学生の必修科目であり、大学生活において必要な日本語能力の習得を目的として開講されている。必修科目であるため、日本語コースの学生は、第1 Semester から第4 Semester まで、それぞれⅠ～Ⅳの「基本日本語」科目を必ず受講しなければならない。「基本日本語」は「日本語会話」「日本語読解」「日本語表現」の3科目で構成されており、各科目が週に2コマずつ実施されている。つまり、半期（15週）で1科目計30コマ、3科目合わせると90コマの授業が行われることになる。

本稿では、これらの科目のうち、2015 年度入学学生にとっての第1 Semester（1 年次前期）に開講された「日本語会話Ⅰ」「日本語読解Ⅰ」「日本語表現Ⅰ」について述べる。

3. シラバス・デザイン

「基本日本語」科目のシラバス・デザインを行うにあたって、まず念頭に置いたのが、「3 授業連係」と「Can-do 記述に基づくタスク遂行型」の二点である。「Can-do 記述に基づくタスク遂行型」に関しては、高校の英語教育におけるモジュール型シラバスの構築について論じた長沼（2009）や大学教育における日本語コース各科目の到達目標を Can-do 記述を用いて設定した鈴木他（2013）、日本語授業におけるシラバス・デザインについて報告している串田（2012）、頼（2015）など、既にいくつもの蓄積がある。しかしながら、タスク遂行型の複数の科目を連係させた日本語授業の実践報告は、管見の限り見当たらない。したがって、「3 授業連係」と「Can-do 記述に基づくタスク遂行型」の二点を「基本日本語」科目のシラバス・デザインの独自性と位置づけ、それらの詳細について述べていくこととする。

3-1. 「3 授業連係」：授業連係のねらい

「基本日本語」の3科目、すなわち「日本語会話Ⅰ」「日本語読解Ⅰ」「日本語表現Ⅰ」については、当初から、トピック・シラバスを採用し、各授業で同じトピックを扱うことで3つの授業を連係させることを企図していた。授業を連係させることには、次の2つのメリットがあると考えたためである。

一つは、同じトピックを扱い授業を連係させることで、知識・語彙・表現の応用が可能になるという点である。つまり、「日本語読解Ⅰ」でインプットした知識・語彙・表現を用いて「日本語会話Ⅰ」で話をしたり、「日本語表現Ⅰ」で文章を書いたりする、といったことが可能になる。そうすることで、科目を横断して学んだ知識・語彙・表現に触れることができるため、定着が促進され、応用力も身に着くのではないかと考えた。

もう一つは、各授業を連係させることによって、「会話」「読解」「表現」という技能による区分を極力取り除き、現実場面により近づけた技能複合型のタスクを取り入れることが可能になるという点である。実際の言語活動、特に日常的なトピックにおける言語活動を考えると、「読んだものについて話す」、「話した内容を文章にまとめて書く」などのように複数の技能が必要なものも多い。たとえば、「旅行」というトピックにおいても、ガイドブックの内容を読み取った上でどこに行くかを相談したり、旅行の経験談を友人に話した後でその経験を SNS に書いたりするといったことが考えられる。鈴木他（2013）でも、今後の展望として「技能統合型タスク Can-do」（p.78）の可能性に言及しており、「タスクごとに Can-do をまとめ、複数の技能を組み合わせることで達成する目標（タスク Can-do）の設定を行い、リストにすることにより、活動を全体としてとらえやすくなる」（p.80）と述べている。こうした指摘からも、実際の言語活動の習得を促すには、「会話」「読解」「表現」の連係が不可欠であると考えた。さらに、各科目においても、「日本語読解Ⅰ」で読んだ内容について意見交換をしたり、「日本語会話Ⅰ」で背景知識を得るための文章を読んだりするなど、「会話」「読解」「表現」の枠にとらわれないシラバス・デザインを意識した。

この3授業の連係を効果的なものにするためには、担当教師間の連携が不可欠である。そのため、毎回、授業が終わるごとに報告書を作成し、それを担当教師間で共有した。そうすることで、授業内容や学生の反応、次回以降への課題といった重要な情報の共有が可能となった。また、報告書を作成するだけでなく、日常的に直接話して情報共有を行っていたことも、教師間の連携、ひいては授業間の連係を密なものにしていたと言える。

3-2. 「Can-do 記述に基づくタスク遂行型」：到達目標の設定

到達目標の設定にあたっては、CEFR^②の共通参照レベルを参考にした。日本語コースで学生に求める日本語能力と、学生の入学時の実際の日本語レベルとを勘案した結果、1年次前期の「基本日本語」科目で到達目標とするレベルは CEFR の B1 レベルが適当であると判断した。そこで、B1 レベルの記述^③を参考に、到達目標を「大学生活で必要となる身近なトピックについて、日本語で情報を手に入れたり発信したりできる」ととし、各科目の

具体的な到達目標を以下のように設定した。

表1：「日本語会話Ⅰ」「日本語読解Ⅰ」「日本語表現Ⅰ」の到達目標

科目	到達目標
日本語会話Ⅰ	1. 自分の立場や興味のあることについて、日本語でやりとりすることができるようになる。 2. 相手の立場や知識に合わせて、話し方や内容の調整ができる。 3. 相手の話に対して、適切にあいづちや質問を入れることができる。
日本語読解Ⅰ	1. 自分に身近なことや関心のあることについての文章を適切に読み解くことができる。 2. エッセイ、小説などから、書き手や登場人物の心情、意図を汲み取ることができる。
日本語表現Ⅰ	1. 自分の体験や関心のあることについて、ある程度の長さのテキストを書くことができる。 2. メールの基本的な構成に基づいてメールを書くことができる。

3-3. シラバス・デザイン

表1の到達目標をもとに、各科目のシラバス・デザインを行った。シラバス・デザインにあたっては、国際交流基金の「みんなの Can-do サイト」を参照した。まず、サイトを利用して CEFR における B1-1 レベル、JF 日本語教育スタンダード（以下、JFS）における B1 レベルの Can-do 記述をピックアップした。次に、その中から、学生のニーズを踏まえて、授業で扱うことが望ましいトピックとその到達目標を決定した。

たとえば、JFS の B1 レベルでは、「旅行と交通」のトピックに関して、以下のような Can-do 記述がなされている。

表2：JFS の B1 レベルの Can-do 記述の例（「みんなの Can-do サイト」より抜粋）

言語活動	Can-do 記述
やりとり	旅行中に会った人にお勧めの場所や店などの詳しい情報を、質問したり、答えたりすることができる
受容	旅行雑誌やガイドブックなどの、ある程度長い文章に目を通して、名所や名物の特徴など、行き先を決めるために必要な情報を探し出すことができる
産出	自分が行った町、ホテル、レストランなどについての報告や感想を、ある程度詳しく旅行サイトなどに書き込むことができる

これらの記述を踏まえて、「旅行」というトピックを取り上げ、それぞれの科目で以下のような到達目標を設定した。

表3：トピック「旅行」における各科目の到達目標

科目	到達目標（＝学習内容）
日本語会話Ⅰ	これから行きたいところ、今まで行ったところについて、名所や名物などの詳しい情報を質問したり、答えたりすることができる
日本語読解Ⅰ	旅行雑誌やガイドブックのある程度長い文章に目を通して、名所や名物の特徴など、行き先を決めるために必要な情報を探し出すことができる
日本語表現Ⅰ	自分が行ったことがある場所についての報告や感想を SNS に書くことができる

この到達目標をそのまま学習内容と捉え、これを基に、実際の教室活動となる具体的なタスクを設定していった。タスク遂行型のシラバスを教室活動に取り入れる意義として、串田（2012）では、「意味のある文脈を言語学習環境で提供」（p.50）し、「特に中上級レベルでの教室活動におけるコミュニケーション能力の向上を促すことにも貢献する」（p.50）ことが指摘されているが、「基本日本語」科目においても、同様の効果を狙っている。

このようにして、各科目で取り上げるトピックと到達目標（＝学習内容）をリスト化し、スケジュール・難易度・トピック同士の関連を踏まえて、トピックの配列を決定、シラバスを完成させた。

4. 授業実践

ここでは、実際に行った授業の実践について述べる。実践を行ったクラスの規模は、1クラス7名である。1つのトピックにおける3科目の配列は、開講曜日や祝日の影響で多少不規則になったものの、概ね「日本語読解Ⅰ」→「日本語会話Ⅰ」→「日本語表現Ⅰ」の順番であった。まず、「日本語読解Ⅰ」でトピックの導入によるスキーマ形成と語彙の導入を行う。次に、「日本語会話Ⅰ」において、タスクに取り組む中で、トピックに関して「学生自身がアウトプットできる内容」をふくらませていく。同時に、構成を意識したアウトプットを練習させる。最後に、それらの内容・構成を踏まえて、「日本語表現Ⅰ」で文章としてアウトプットし、ここでは、「正確さ」を重視した指導を行う。このような流れにすることで、一つのトピックにおいて3科目がスムーズに係ることを目指した。

以下、具体例として、「お店」と「映画」という2つのトピックにおける実践を挙げる。

4-1. トピック「お店」

「お店」というトピックにおける到達目標、授業の実施順は次のとおりである。各科目の授業を2回ずつ、計6回行った。

表4：トピック「お店」における各科目の到達目標と実施順

科目	到達目標（＝学習内容）	実施日（順番）
日本語会話Ⅰ	近所のお勧めのお店の立地や評判について、質問したり、答えたりすることができる	6月4日（③）
		6月5日（④）
日本語読解Ⅰ	お店のレビューサイトなどに目を通して、お店の長所・短所を理解し、行きたい店を選ぶことができる	5月12日（①）
		5月15日（②）
日本語表現Ⅰ	近所のお勧めのお店の特徴や行き方などを SNS に書くことができる	6月11日（⑤）
		6月16日（⑥）

以下、トピック全体の流れに沿って、授業の内容を詳述していく。

4-1-1. 導入（日本語読解Ⅰ）

まず、「お店」というトピックの導入のために、「三宮駅の近くで雰囲気のいいカフェに行きたいとき、どんなことを調べればいいのか」という問いを与え、お店を選ぶときに必要なポイント（立地、行き方、メニュー、おすすめ、値段、電話番号、営業時間など）についてブレインストーミングを行った。

次に、「カフェのメニューに出てくるカタカナ語」を学生にリストアップさせた。カタカナ語は学生が苦手とするものの一つであるため、正しい表記を確認しながら語彙リスト④を作成していった。

4-1-2. レビューサイトを用いたお店の比較（日本語読解Ⅰ）

「日本語読解Ⅰ」では、三宮駅近くの2軒のカフェのレビューサイト⑤を用意し、両方を読むタスクを行った。精読するのではなく、導入で考えた「お店を選ぶときに必要なポイント」をスキミングするように促した。個人でポイントのリストアップを行った後、ホワイトボードに転記することで、全員で情報を共有、それぞれのお店の特徴を確認した。

その上で、2軒のうち「どちらの店がよいか」を学生に選んでもらった。その際、人数、性別、目的、時間、食べ物の好き嫌い、予算といった条件を設定し、その設定の下で、どちらの店がより好ましいか、意見を出してもらった。学生はそれぞれの観点から、「こちらのお店は高すぎる」「授業のあとに行くので夜まで開いているお店のほうがいい」といった両者の長所・短所を見つけ、活発な意見交換ができた。実際に三宮にあるお店を題材にしたことで、「実際に行く可能性がある」という学生の動機づけになったようである。

4-1-3. 条件に合ったお店を探す／紹介する会話（日本語会話Ⅰ）

「日本語読解Ⅰ」で扱った「お店の長所・短所を理解し、行きたい店を選ぶことができる」という Can-do を発展させ、「日本語会話Ⅰ」では、「条件に合ったお店を紹介する」というタスクを課した。

次に、お店を探す／紹介するときの基本的な会話のパターン例を提示し、それをもとに口頭練習を行った⁽⁶⁾。

＜お店を紹介してもらうために聞く＞

- ＜行ったことがあるお店を紹介する＞

- ・ （立地） に （お店の名前） っていうお店があるんだけど、
（特徴①） で [だけど]、 （特徴②） で、 （評価） だよ。

・ (立地) に (お店の名前) っていうお店がある らしいんだけど、
(特徴①) で [だけど]、 (特徴②) で、 (評価) らしいよ。

- 1) 小さい紙に、「そのお店にはどのようなときに行くのがいいか（＝お店選びの条件）」を書いてもらい、回収。
- 2) 学生 A がそれをくじのように引いて、書いてある条件に合わせて「辛いものが食べたいんだけど、どこかいいお店知らない？」と全員に聞く。
- 3) 全員の中で、その条件を書いた（辛いものが食べたいときに行く店を選んだ）学生 B が、お店の特徴を述べて説明する。
- 4) 学生 A は、予算やお勧めの商品、立地など、ほかに知りたい／必要な情報があれば聞く。学生 B は答える。
- 5) 学生 A と学生 B で上手に会話を終わらせる（今度食べに行ってみるね、一緒に食べに行こう、など）。
- 6) 学生 A と学生 B 以外の学生は、ワークシートに話の内容を書き込む。

— 90 —

イト全員で食事会をする」「日本に遊びに来た友人と食事に行く」) それぞれに適したお店を選ぶタスクを行った。この授業の後、学生が勧めていたお店に他の学生が行ってみたという話を聞き、タスクが現実場面につながっている様子が確認できた。

4-1-4. SNS 上でのお勧めのお店の紹介（日本語表現Ⅰ）

続く「日本語表現Ⅰ」では、「日本語会話Ⅰ」で取り上げたお勧めのお店を SNS で紹介するというタスクを行った。書くにあたっては、「お店を選ぶときに必要なポイント」すべてではなく、重要なものをいくつかピックアップして書くように指示し、作業が早く進んだ学生には「どうしてこの情報を選んで書くことにしたのか」を口頭で説明してもらった。また、「お店を選ぶときに必要なポイント」に加えて、「お店のお勧めのポイント」もそれぞれに挙げてもらった。学生からは「安くておいしい」「落ち着いた雰囲気である」「にぎやかな雰囲気なので大きな声で会話しても迷惑にならない」などが挙がった。

プリントに下書きした紹介文を教員がチェックし、学生がフィードバックを踏まえて修正したものを SNS®に投稿してもらった。投稿の際には、自由に写真を添えてもらった。学生の投稿には、教員や他の学生からのコメントがつき、通常の SNS におけるコミュニケーションに近いやり取りが実現した。

今日は、私の勧めのお店を紹介します。
日本に留学した時からずっとよく行く百足屋という居酒屋です。
場所は、阪急王子公園駅から東の線路沿いに5分ぐらいです。この店の特徴は、焼鳥専門で、自家製ソースをつけた焼鳥が人気です。そして毎日替わる家庭料理を味わえます。日本酒が好きな人には家庭料理に添えて飲むことを進めます。日本酒やワインなど多彩なお酒が揃っています。さらに生ビールが290円で安く飲みます。店内はテーブルが4つで、7人が座れる bar もあり、気楽な雰囲気なので一人でも10人ほどの団体でもびったりです。
また、老若男女に関わらず人気メニューは、自家製の杏仁豆腐とクリームブリュレのデザートはこの店ならではの味です。予算は食べたり飲んだり次第ですが、一人当たり2000円～3000円ほどです。私は1人でもよく行く店ですが、友達遊びに来たら必ず連れて行くお店です。または学校の先生や友達10ほど連れて行ったこともあります。日本人でも、外国人でも、誰でも気楽に訪ねますので、皆さん、是非行ってみてください。
ちなみに、営業時間は 5:30PM～12:00AM L.O 11:30 までです。定休日は毎週月曜日です。



図1：学生が SNS に投稿した「お勧めのお店」の紹介文のひとつ

4-2. トピック「映画」

「映画」というトピックにおける到達目標、授業の実施順は次のとおりである。「お店」と同様に、各科目の授業を2回ずつ、計6回行った。

表6：トピック「映画」における各科目の到達目標と実施順

科目	到達目標（＝学習内容）	実施日（順番）
日本語会話Ⅰ	好きな映画のあらすじや感想を聞いたり、説明したりすることができる	7月2日（③）
		7月3日（⑤）
日本語読解Ⅰ	映画のあらすじを読んで、内容を理解することができる	6月19日（①）
		6月23日（②）
日本語表現Ⅰ	好きな映画のレビューをSNSに書くことができる	7月2日（④）
		7月7日（⑥）

以下、トピック全体の流れに沿って、授業の内容を詳述していく。

4-2-1. 導入（日本語読解Ⅰ）

トピック「映画」の導入として、「起承転結」の説明を行った。映画の面白さを支えるのは「起承転結」の構成であり、「起」で登場人物が一通りそろい、「承」で物語が進み、「転」で問題や意外な展開が起こり、最後に「結」でまとまる（あるいはどんでん返し起きる）という流れを解説した。また、映画に関する語彙（ジャンルや上映、公開、配給、興行収入、視聴率、スタッフ、俳優、主役、脇役、など）の導入も行った。

4-2-2. 映画のあらすじの読解と結末の予測（日本語読解Ⅰ）

「日本語読解Ⅰ」では、映画のあらすじの読解を行った。授業を行った2015年6月当時に上映されていた映画「あん」と「イニシエーションラヴ」を題材に、それらのあらすじを教材とした。

表7：映画「あん」のあらすじ

<p style="text-align: center;">「あん」</p> <p>縁あってどら焼き屋「どら春」の雇われ店長として単調な日々をこなしていた千太郎。そのお店の常連である中学生のワカナ。ある日、その店の求人募集の貼紙を見て、そこで働くことを懇願する一人の老女、徳江が現れ、どらやきの粒あん作りを任せることに。徳江の作った粒あんはあまりに美味しく、みるみるうちに店は繁盛。しかし心ない噂が、彼らの運命を大きく変えていく…。</p> <p style="text-align: right;">映画「あん」公式サイトより（http://an-movie.com/story/）</p>

表7のように、映画のあらすじは、ほとんどが「起」「承」「転を少々」という構成で書かれている。この「いいところで終わる」感覚を学生に理解させることが、今後の「お勧めの映画の紹介」につながる重要なポイントであったため、折に触れて強調した。

また、あらすじを読解した後で、結末を予測するタスクを行った。それぞれが結末を考え、その展開を発表することで、ストーリーを説明する「日本語会話Ⅰ」のタスクへの足がかりとした。「あん」に関しては、「千太郎と徳江は親子だった」「徳江は千太郎の店を乗っ取るつもりだ」「徳江は癌だった」など、さまざまな結末の予想が挙げられた。

最後に、「あん」の公式サイトから予告編の映像を閲覧し、あらすじと合わせて内容確認を行った⁽⁹⁾。

4-2-3. お勧めの映画を紹介する会話（日本語会話Ⅰ）

「日本語読解Ⅰ」で学んだ映画のあらすじの構成を踏まえて、「日本語会話Ⅰ」では、自分のお勧めの映画を紹介する会話を練習した。映画を紹介するにあたっては、ただあらすじを説明するのでは不十分で、あらすじを説明する前に、まず「映画を一言で簡潔に説明する」ほうが聞き手に親切であり、さらに、あらすじを説明した後は、「お勧めのポイントを紹介する」ことが求められる。そうした構成があることを導入した上で、お勧めの映画を紹介するときの基本的な会話のパターン例を提示し、それをもとに口頭練習を行った。

表8：「お勧めの映画を紹介する」会話のパターン例

<話を切り出す>

- ・「（映画名）」って、知ってる／見たことある？

<映画を一言で簡潔に説明する>

- ・「（映画名）」って （一言で説明） 映画／話なんだけど、・・・

<登場人物について説明する>

- ・【起】「（名前）」っていう男の子／女の子／おばあさんが、（性格や特徴） でね、・・・

<物語の展開を説明する>

- ・【起／承】・・・。そしたら、・・・。
- ・【転】でも／実は／そしたら、・・・して、みたいな話。

<お勧めのポイントを紹介する>

- ・（お勧めのポイント） がすごく （お勧めの理由） なんだよね。

口頭練習の後、ペアになり、互いに映画を紹介しあうタスクを行った。コンパクトにまとめて「いいところで終わる」ことができていた学生もいれば、細かい部分まで説明しすぎたり、最後のほうまで展開を話してしまったりする学生もいた。しかし、回を重ねるごとに説明を短くするように心がけさせたことで、徐々に簡潔に説明できるようになってきた。語りが短くなった分、情報が少なくなるので、自然と相手からの質問も増え、より会話らしくなった。映画の紹介を聞いて、「それ見たい！」とタイトルをメモしている学生もあり、ここでもタスクが実際のコミュニケーションとして成立する瞬間があった。

4-2-4. SNS 上でのお勧めの映画の紹介（日本語表現Ⅰ）

「日本語表現Ⅰ」では、お勧めの映画を SNS で紹介するタスクを行ったが、まずその準備として、あらすじを文章化する練習を取り入れた。具体的には、4 コママンガや YouTube⁽¹⁰⁾を見て、「転」の部分までを文章化する練習を行った。また、あらすじの後に感想も書かせて、紹介文の構成に基づく文章作成を指導した。

お勧めの映画についての紹介文作成では、今まで学んだことを生かして、それぞれに工夫が見られる紹介文作成ができた。

今日は「キングスマン」という映画について紹介します。
「キングスマン」は、不良少年が人類を助けるという話です。
ロンドンにある高級スーツ店「キングスマン」の実体はこの国にも属さない最強のスパイ組織です。この組織のエリートスパイ、ハリーと組織の指揮者は一緒に仕事をしました。
ある日、チームの一員が殺されました。その代わりに、新人を募集することになりました。この時、昔ハリーの命を助けてくれた恩人の息子、エグジーが現れました。そして、ハリーはこの少年にスパイになる可能性を見出し、候補生として抜擢しました。
一方、何名の科学者が数日内に行方不明になりました。この首謀者は人類を殺す計画を進めるという話です。
スパイについての話なので、アクション場面がとてほかよくて、素晴らしいと思います。ぜひ、皆さん、見てみてください。

図2：学生が SNS に投稿した「お勧めの映画」の紹介文のひとつ

5. 授業の効果と課題

基本日本語の授業では、初回の授業において「自己評価シート」（図3参照）を配布し、学生にトピックごとの到達目標に対する自己評価を書いてもらっていた。これらの自己評価は Can-do 記述によって提示されており、その記述が「できる」か「できない」か、6段階の数値で評価してもらった。また、それに加えて、具体的にどのようなことができるか／できないかもメモしてもらった。そして、最終回の授業でも、同様の自己評価を行ってもらい、具体的にどのようなことができるようになったか／まだ難しいかをメモしてもらった。

項目 (Can-do)	授業前	メモ	授業後	メモ
1 授業シラバスを読んで、授業内容や評価の方法など、授業を選ぶために必要な情報を探し出すことができる	1 2 3 4 5 6		1 2 3 4 5 6	
2 観光地の名所や名物を紹介するウェブサイトやガイドブックを読んで、主要な情報を理解することができる	1 2 3 4 5 6		1 2 3 4 5 6	

図3：「日本語読解Ⅰ」の自己評価シートの一部

この初回（授業前）と最終回（授業後）の自己評価を比較すると、多くは初回時に比べて自己評価が高まっていた。学生が「できるようになった」と感じているものには、「ふさわしい表現・言葉で書けるようになった」「前より店の特徴を説明できるようになった」というような語彙・表現面での成長、「そのお店の位置や評判、予算などいろいろ聞くようになった」「話す人によっておすすめの特徴を考える」「相手が見たいと思うようなことを話す」などのような内容面での成長、「構成に注意している」「起承転で書ける」のような構成面での成長があり、このような面において、一定の効果があつたことが推察される。

しかし、トピックによっては、自己評価が変わらない学生や自己評価が下がってしまった学生もいた。学生が「まだ難しい」と感じているものは、「文法的な間違いがまだ多い」「文法の間違い」のような文法面での難しさがほとんどであった。

今回、タスク遂行型のトピック・シラバスを採用したことで、（1）トピックにおける語彙・表現が身につく、（2）そのトピックに関して話せる内容が広がる、（3）そのトピックにおいて適切な構成を理解する、といった効果が得られた。一方で、文法面の正確さには十分に注意が向けられなかったため、そのことが学生の文法面における不安につながったのではないかと考えられる。伊藤・大和（2005）は、コミュニケーション活動と文法指導を融合させた授業実践について論じる中で、「実践的な言語のコミュニケーション能力の習得と文法指導とは、本来、二者択一的なものではなく、相互補完的な関係にある」（p.181）と述べている。同様のことが、タスク遂行型の指導と文法指導においても言えるだろう。タスクが遂行できたかどうか、到達目標を達成したかどうかだけに目を向けるのではなく、必要に応じて、文法面での積み上がりを意識し、文法面に焦点を当てた授業内容を盛り込んでいくこと、すなわち **Focus on Form (FonF)** の指導を行っていくことが今後の課題だと言える。

ただし、これらの効果と課題は、あくまで「学習者の自己評価」という一側面から得られたものにすぎない。このような、Can-do 記述の質問紙を用いた自己評価に関しては、「自己評価であるため学習者が評価に主体的に取り組める」（島田 2010, p.267）という利点が挙げられるものの、一方で「個人の社会・文化的背景、言語不安や性格要因などから、自己の言語能力を過大あるいは過少に自己評価してしまう」（玉岡他 2005, p.65）可能性も指摘されている。また、プログラム評価においては、プログラム参加者やプログラムの担当者、他部署のメンバー、所属組織の管理者など複数の視点で評価することの必要性が指摘されている（札幌 2011）。このようなプログラム評価のあり方は、「基本日本語」科目の実践にも置

き換えて考えることができる。シラバスが全体としてどのように機能したか、その効果の検証には、参加者である学生だけでなく、担当教員や他コースの教員、大学事務職員なども含めての多角的な評価が求められるだろう。

6. おわりに

本稿では、「基本日本語」3科目を例に、「3科目連係」と「Can-do 記述に基づいたタスク遂行型」を特長としたシラバス・デザインの方法と授業実践について報告した。3科目を連係させることで、計 90 コマという大きい流れの中での授業実践が可能になった。一方で、科目ごと・トピックごとに細かく到達目標を設定したことで、方向性を見失うことなく授業を行うことができた。それぞれの科目の長所を生かし、不足を補うという意味で、有用なシラバス・デザインだったと言えるのではないだろうか。今年度の反省を生かし、次年度のシラバス・デザイン、実践に役立てていきたい。

謝辞

「基本日本語」科目のシラバス・デザイン、および実際の授業運営にあたっては、神戸学院大学グローバル・コミュニケーション学部日本語コースの小矢野哲夫教授、栗原由加准教授にご協力・ご助言をいただきました。心より御礼申し上げます。

〔注〕

- (1) 筆者は、この「基本日本語」科目全体のコーディネートを行っている。また、2015 年度前期には、3 科目のうち、「日本語会話Ⅰ」を実際に担当した。
- (2) ヨーロッパ言語共通参照枠 (Common European Framework of Reference for Languages)。2001 年に欧州評議会 (Council of Europe) が発表した、言語能力を評価するための共通の枠組み。
- (3) 全体的な尺度としての B1 レベルの記述は、以下の通りである (国際交流基金 2014b, p.9 より抜粋)。
 - ・仕事、学校、娯楽で普段出会うような身近な話題について、標準的な話し方であれば主要点を理解できる。
 - ・その言葉が話されている地域を旅行しているときに起こりそうな、たいていの事態に対処することができる。
 - ・身近で個人的にも関心のある話題について、単純な方法で結び付けられた、脈絡のあるテキストを作ることができる。経験、出来事、夢、希望、野心を説明し、意見や計画の理由、説明を短く述べることができる。
- (4) 「日本語読解Ⅰ」で、トピックごとに「語彙リスト」を作成させ、そのトピックでよく使われる語彙や自分にとって重要な語彙をリスト化させた。この「語彙リスト」を「日本語会話Ⅰ」「日本語表現Ⅰ」の授業でも取り出して用いる様子も見られ、授業内容の連係に役買っていたといえる。また、その語彙リストから小テストを実施することで、語彙の定着も促進されたようである。
- (5) 使用したのは食べログ (<http://tabelog.com/>) とぐるなび (<http://www.gnavi.co.jp/>) である。
- (6) このパターンはあくまでも「例」であり、この通りに話す必要はなく、「お店を探す／紹介する」という課題が遂行できれば、形式は問わなかった。また、あいづちやフィラーも適宜入れさせた。実際のクラスでは、パターンを確認しながらないと課題遂行が難しい学生もいるので、このようなパターン例を提示することは必要であると考えられる。
- (7) 「入門ゼミナール」は学部共通科目のひとつである。留学生と日本人学生が合同でクラスに参加して、演習形式の授業が行われる。

- (8) 使用した SNS は Facebook (<https://www.facebook.com/>) である。日本語コースの学生と教員の非公開グループを作成し、そのページに課題を「投稿」という形でアップロードしてもらった。
- (9) 予告編の中で「らい」という表現が出てきたため、ハンセン病についても解説した。映画や小説、時事問題などを教材として扱う場合、日本語だけでなく背景知識の理解を深めることも重要となる。
- (10) 使用した YouTube の動画は「振り子」(<https://www.youtube.com/watch?v=O26qmkHYrZs>)、4コママンガは『フジ三太郎』である。

〔参考文献〕

- 伊藤崇・大和隆介（2005）「コミュニケーション活動と文法指導が融合したメタ認知的活動を伴う授業の実践とその効果に関する研究」『岐阜大学教育学部研究報告.教育実践研究』7 岐阜大学 pp.181-197.
- 串田紀代美（2012）「Can-do 形式によるタスク遂行型のシラバス構築の試み：中上級レベルの「文法復習」シラバスの見直し」『日本研究センター教育研究年報』1 アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター pp.39-65.
- 国際交流基金（2014a）『JF 日本語教育スタンダード 2010 第三版』
- 国際交流基金（2014b）『JF 日本語教育スタンダード 2010 利用者ガイドブック 第三版』
- 島田めぐみ（2010）「自己評価 Can-do statements に関する一考察—客観テストとの比較を通して—」『東京学芸大学紀要.総合教育科学系』61(2) 東京学芸大学学術情報委員会 pp.267-277.
- 鈴木美加・藤森弘子・藤村知子・鈴木智美・中村彰・花菰悟・伊集院郁子（2013）「大学教育における日本語コースの Can-do 設定—日本語の技能を言語知識や態度と結びつけた記述の試み—」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』39 東京外国語大学留学生日本語教育センター pp.65-82.
- 玉岡賀津雄・松下達彦・元田静（2005）「日本語版 Can-do Scale はどれくらい正確に日本語能力を測定しうるか」『広島大学留学生教育』(9) 広島大学留学生センター pp.65-78.
- 長沼君主（2009）「Can-do 評価—学習タスクに基づくモジュール型シラバス構築の試み」『東京外国語大学論集』第 79 号 東京外国語大学 pp.87-105.
- 札野寛子（2011）『日本語教育のためのプログラム評価』ひつじ書房
- 頼美麗（2015）「文型シラバスの授業を Can-do 化する試み：Can-do 化授業が学習者に及ぼす影響に関する一考察」『別府大学日本語教育研究センター紀要』(5) 別府大学日本語教育研究センター pp.3-13.

〔参考 URL〕（いずれも 2015 年 10 月 1 日アクセス）

- 国際交流基金「みんなの Can-do サイト」
<https://jfstandard.jp/cando/top/ja/render.do>
- 映画「あん」公式サイトより〔ストーリー〕
<http://an-movie.com/story/>